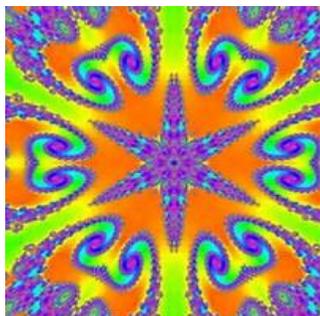


万華鏡

有森信二



美奈は、ススキの中を懸命に駆けた。銀狐の尻尾が大きくそよいでいる中を、島の突端の岬に落ちる夕陽に向かい駆け下りた。弟の喬がいつも大事にしているものを二階の部屋で見付け、両の拳にしっかりと握りしめている。

後ろから、小さな頬を膨らませ、息せき切つて喬が追いかけてくる。

喬に襟首をつかまれることは、まるで一卷の終わりなのだとでもいわんばかりに、美奈は黄昏の空気を強く蹴つた。肩に手が届きそうになるすぐ近くまで、喬が迫ってきた。

「返せ。姉ちゃんの泥棒」

ススキの群れをくぐる度に、ゴム草履の足が、じゃりつと痛む。開いた口からは、冷たい空気が容赦なく入り込み、喉のあたりでヒュッと鳴る。

「馬鹿野郎、俺んだぞ」

美奈は息苦しくて、前につんのめりそうになりながら、でも、絶対に手の中のものをもを渡したくないと思った。心臓がパタンクしそうにきつく、踝のあたりが痺れるけれど、この甘つたれ坊主の弟には、決して渡してはならないのだ。意地悪が過ぎるかなと思ったりもするけれど、この痩せぎすの、いつも鼻水をすすりながら泣いてばかりいる喬が、こんなに拘つて追いかけてくるのは一体何故なのだろうと、そのことの方が美奈の興味をそそつた。

小学三年生のくせに、近所の子供たちの中でいつも喬は、一人外におっぼり出されている。しばらくは一緒に遊んでいても、この気の弱そうな目をした弟は、決まって同じ失敗を

やらかし、笑われ、馬鹿、うすのろと罵られ、最後には殴られたり転がされたりして、ひくつきながら泣いている。

だから、子供たちは、喬のことを女の子だと詰った。

「おい、女の子」

「立小便、できんやろ」

「お前の祖父さんが、磯に浮かんでいた若い女を焼いたから、祟りがきたんだってな」

といった具合で、喬は喬で、いい返すでもなし、みんなを睨み返すでもなし、肩を震わせてばかりいた。美奈はそんな喬を見付けると我慢できなくなり、手当たり次第に目の前のものをつかんで、連中の中に突進して行つた。

「きた、逃げろ、鬼婆だ」

子供たちは、大慌てで逃げて行く。そんなときも喬はまだ目を落としたまま、嗚咽を漏らしている。

祖父ちゃんは今早く亡くなつてしまつたが、先の大戦中、島の磯に流れ着いた死人を引き上げ、岬の突端の洞で焼く役目だつたらしい。もう十数年前のことだ。

その喬が、この頃、夕食を一番先に済ましてしまうと、囲炉裏の火には見向きもせず、二階の部屋にすぐに入り込み、下りてこなくなつた。喬のことだから大きな音をたてることもなく、何一つ騒ぐこともないのであるが、美奈には奇妙なことに思えてならない。

これまででは、農作業の後で父が焼酎を飲み、母が繕いものなどをしてしている囲炉裏の傍で、黙つて青白い顔を火にかざし

ながら、火箸を飽くことなくまぜていた。小学三年生であれば少しぐらいは自分で氣を利かし、家業の段取りなど自然に覚えたりする年頃でもあるのに、一向にその氣配はない。

父も母も、喬のことは生み損ないだと思つているふうである。であつても、喬は長男であることに変わりはない。

美奈は夕方、喬が二階に上がつてから一時間ぐらい経つた頃、少し覗いてみたい氣になり、階段を爪先立ちで上がつて行つた。部屋とはいつても、古い農家の屋根裏を改造した天井の低い、それでいてだだっ広い、間仕切りのない物置兼用の部屋であるから、背戸の裏を通り抜ける隙間風が、音をたてて吹き込んでいた。

喬は、その板張りの隅に古畳を三枚だけ敷いた、海にポツンと浮かんだ小島みたいな薄暗い裸電球の下で、何かに夢中になつている。背後の美奈には、全く氣付くふうもない。微動もせず屈まつた肩の向こうで、何かと向かい合つている。十月末とはいえ、火の氣の全くない部屋は、しばらく息を詰めて立つていると、肌寒さを覚える。灰色に変色した磨りガラス窓の、ところどころ朽ちて落ちた棧のあたりに、ひゅうと風が鳴る度に、部屋全体が怪しく揺れ動いた。美奈は、近付いたものかどうかためらつた。今まで喬が、ぼんやり手遊びをしていることはあつても、一つのこと夢中になつてゐる姿など見たことがなかつた。

喬は、庭の草を巻るにしても取り残し、粗殻を干すときもそこから零しては怒られ、首を竦めてばかりいる。そんな、

いつも同じ失敗ばかりしているのは、生来のぼんやりした性格と、臆病さのためだとばかり思っていた。

窓ガラスが一際強い風に大きく鳴ったとき、美奈は思わず体を震わせた。そして次の瞬間、足を射抜かれた恰好に、立ち竦んでしまった。目の前に、ぎらりと脂ぎった蛇の目が、美奈に飛びかかろうとしていた。蛇は、巨大な胴体から伸び出した鎌首を高く上げ、獯猛な目には血の色をいっぱいに湛えていた。

「姉ちゃん」

喬の鋭い声が飛んだ。気が付くと、蛇も、獯猛な蛇の目もかき消えていた。いつもの気弱な喬の顔が、怪訝そうな表情で美奈を覗き込んでいた。

「どうかしたん」

美奈は頭を振った。ふうつと気が遠くなりかけたのが、元に戻った。喬の手には、帯が握られている。

「それどうしたのさ」

「サツちゃんからもらったんだ」

喬は、一年半前まで叔母の幸子と一緒に寝起きしていた。幸子は、同じ島の隣町に嫁いで行ったばかりだ。幸子が嫁ぐ日、喬は自分も同じ車に乗るといい張り、火箸を持ち出し、荒れたのだった。

「サツちゃんからね、ふうん」

赤い帯が、灯の加減でぬめって見えたのだったろう。蛇の目とおぼしきあたりには、赤い梅の花が色濃く描かれていた。

喬は、幸子と寝起きするうちにもらったものを籐の籠に入れ、大切にしていた。昼間、美奈が喬のものを奪い、ススキの中を駆けたのは、鮮やかな色のカルタの札一枚を奪って逃げたのだった。

美奈は、喬が宝物入れにしている籐の籠の中に何が入っているのか、正確には知らない。見せてもらえないのである。間仕切りなどない喬の三畳の間は、誰にも犯すことのできない場所になっている。泣き虫のくせに、美奈が部屋の掃除に入り、勝手に畳の上の持ち物でも触ろうものなら、地団駄を踏み、怒る。そのあまりの激しさに、畳の島には立ち入ることができなくなってしまった。

カルタは、いつも屋根裏から出入りしている盗人猫が侵入し、蹴散らして行ったのだったろうか。畳から零れ落ちていた数枚のうちの一枚を美奈が拾い、階下の自分の部屋で眺めていたのだった。

「姉ちゃん、返せ」

喬が血相を変えて乗り込んできたため、美奈はからかつてみたくなつた。一畳の外に落ちてたんだ。何だろうと思つて、見てたんだ

「いいから、早く返せ」

喬はいつもの喬ではない。両足を踏ん張つて、部屋の入口に立ち尽くす。

「そんなに大切なものなの、これ」

美奈は立ち上がり、取れるものなら取つてごらん、というふう、手を伸ばし指の先端に札を掲げた。喬の背では、美

奈の肘ぐらいまでしか届かない。美奈は喬の体当たりをかわすと、ゴム草履を突っかけ裏庭に走り出たのだった。

裏道を抜け、ススキの生い茂った野原を駆けた。普段だと喬は走りも遅く、美奈のスピードにはかなわない。それが、目を剥き、齒を食いしばって後ろに迫ってくる。

「サッチャンからもらったんだぞ。ぼくんだぞ。姉ちゃん、泥棒だぞ。一枚でもなくしたら、駄目なんだ」

喬は美奈がスピードを少し緩めたとき、すかさず胸元に飛び込んできた。息を急いで胸先によじ上り、ついに美奈の指の中の札をもぎ取った。喬のこの気迫はどこからくるのだろう、と美奈は半ば驚いた。いつも、学校でも近所の連中にもいいようにあしらわれ、泣かされてばかりの喬にも、こんな荒々しさの持ち合わせがあるのだ、と首を傾げた。

叔母の幸子は、幼い頃にリウマチを患ったことで、心臓に後遺症の残る体となり、いつも二階の部屋の布団の中で過ごしていた。

幸子がいた当時は、二階全体に十畳の畳が敷かれていた。喬にとつて姉ちゃんといえば美奈を指すことになるので、サッチャンと呼ぶことになった。サッチャンは田畑に出ることもないので、幼い喬の守りを引き受けるといふ役目をこなしているうち、自然と一緒に過ごすことになった。

学校から帰ると、田畑の仕事が待っている美奈に比べ、喬はサッチャンと遊んでいけばいい。サッチャンはゆつくりと時間をかけてではあるが、台所仕事はできるので、特別に具

合が悪いとき以外は、みんなの食事当番を勤めた。

美奈も喬も、サッチャンの作る料理が好きだった。中でもとろけるほどに煮込んだカレーライスは二人にとつて大のこ馳走で、カレーのときは家の外にまでいい匂いがたち込めた。他にもトリのカラ揚げや、アジの南蛮漬けや、バラ寿司なども得意で、見かけも美しいし、実際美味しかった。

サッチャンが台所にいる間、喬は二階から絵本を持ち下り、傍で大人しく見入った。サッチャンは、ときどき胸苦しいといつて寝込むことがあったが、まわりに心配をかけるというほどのしかめ面をしたことはなかった。

サッチャンの具合が悪いときは母が台所に立つのだが、母の料理は白菜の季節は白菜の味噌汁や漬け物、筍の時期は筍の煮付けというふうに、内容が決まっていた。

美奈も喬も去年の春の遠足までは、サッチャンが作る海苔巻き、散らし寿司、カラ揚げやウインナーなどの入った弁当を持って行き、みんなを羨ましがらせた。

美奈は昌子や恵子などの仲良しグループに、海苔巻きやカラ揚げを分けてやった。

「美味しい」

「綺麗だわ。いいねえ」

昌子も恵子も最後まで大事そうにとつて置き、噛みしめながら食べた。

「ミカンあげる」

「キャラメルあげる」

二人からミカンとキャラメルをもらったけれど、サッチャン

んの作った海苔巻きやカラ揚げの方が何倍も美味しかった。

美奈も喬も、サッチャンが嫁に行く、と母から聞いたときは嘘だと思った。

いつも畳んだ布団を背にして、座っているとところか、編み物をしているところか、ゆつくりした動作で台所に立っているところしか見たことがなかったから、サッチャンはどこへも行かないものと決めてかかっていた。というのも、庭を歩くのさえ大儀そうにしているので、嫁になど行けないものと思っていた。

喬が頓狂な声で、「嘘だろ。サッチャンはどこにも行かない。行かないよ。だって、そういつたんだ」といい、大急ぎで二階に駆け上がった。サッチャンは、喬が泣きべそをかきながら上がったので察しがつき、「まだ、何にも決まつとらせんよ。今、下ではどんな話になつとるの」と聞いた。

「漁師の家に行くつて、母ちゃんがいった」

「本当に何も決まつてないよ。父ちゃんが、一回会つてみたらどうかというから、相手の人にわざわざきてはもらつたけど」

「ぼくたちのいないときに」

「一昨日、浜本商店のお座敷で」

浜本商店は、村で唯一の雑貨屋であり、離れの座敷を村の会合などにも提供していた。

「いい人だよ。でも、私のこの姿を見て、とても動揺しとらしたから、これは無理なことと思つたわよ。だってね、漁師

さんの家は、捕れた魚を奥さんが次々に捌いて干物を作ったり、売り込んだり、いろんな忙しい仕事があるというから。

多分、農家より大変なのじゃないかしら」

サッチャンは積み重ねた布団を背中に、何でもないことだからと笑いながらいう。

「漁師の仕事は、夕方沖合に出て、早朝に戻ってくるというのよ。漁に出る方もきつい仕事だけど、奥さんは旦那さんのことを心配しながら送り出し、夜明け前には起き出さなきゃならないというわ。私がいくら浜本商店の座敷で畏まつていたつて、立ったり座つたりさえ不自由だということにはわかつた筈よ」

喬は、サッチャンの言葉を聞いてみると、だんだん安心してきたらしい。サッチャンがいなくなると、絵本を読んでもらつたり、カルタを教えてもらつたり、美味しいごはんを作つてもらつたりできなくなる。学校でからかわれたり、村の子供たちから虐められたときも、サッチャンは面倒臭がらずに全部話を聞いてくれるのだ。

サッチャン自身、この見合いの話はもう済んだことだと考えていたようだ。

実家であるとはいえ、兄の代になつた家にいつまでも厄介になるのも気が咎めるので、せつかくの兄の薦めであるし、無下に断るわけにもいかないと、見合いというものに初めて出たということだつたらしい。そこで、案の定、自分の体調では漁師の嫁になどなれるわけがない、と心は決まっていた。土台、畑の草筆りすらしたことがない。学校に上がつてか

「私も、体育の授業は全て見学で、運動会などは応援の方にも加わったことがないという。そんなことで、年々植え付けられてきた自分への自信のなさが、人に交じることから自然に遠ざけていた。」

「間違いなくこの話はお流れよ」

「母ちゃん何であんなこというんだろ」

「私にも、合点がいかないわねえ」

喬は、ふうんと黙り込んだ。こんな泣き虫でも、妙に勘の働くところがあつて、サッチちゃんもそこは一目置いていた。カルタなど、何度もやらないのに、二、三回で殆どの札を覚えてしまった。わざと乱雑に並べていても、裏返しに並べていても、読み札の出だしを聞いただけで、他の札の下敷きになりかかった札まですばやく引いた。

「サッチちゃんがいうんなら、間違いはないね。でも」

「でも、どうしたの」

「よくわかんない。サッチちゃんがいてくれないと、ぼく困るんだ。サッチちゃんは、ぼくの本当の姉ちゃんなんだから」

間違いなく断られるだろうと読んでいた幸子の見合い相手から、「是非に」という返事がきたのは、三日後のことだった。期限の一週間を待たない、早々の返事だった。

「お受けします、との返事でいいか」

父が直接、サッチちゃんの住む二階にやってきた。父は珍しく正座などして、言葉もどこか上ずっている。

「ただ、家の中のことをしてくれればいい、と向こうはいっ

ておられたけど、本当にいいのかなあ。ともかく、何といたつて、是非にということだ」

「考えもしなかったわ。だつて、最近の私は特に、布団の傍から離れていないから普通に歩くのも不自由だし。でも、少

だけ、そう一日だけ考えさせてもらえないかしら」

父は頷くと、階段を下りて行った。

「サッチちゃんにきてほしいつて、こと」

「どういうことかしら」

サッチちゃんは黙り込んでしまった。喬が傍にいても、口も聞かないほどに黙り込んだサッチちゃんになつてしまった。

でも、一時間と経たないうちに、サッチちゃんは余所行きの着物に着替え、階段を下り、父と母に向かい合った。

「こんな私でよかつたら、喜んでお受けしますと伝えていただけないでしょうか。父母亡き後、兄さん、義姉さんにはたいへんお世話になり、ご迷惑ばかりおかけしました。この話が進んだとしたら、一層ご迷惑をかけることになりましたが、よろしく願ひいたします」

傍で聞いていた美奈も喬も、サッチちゃんがキビキビと動き、はつきりともものをいうのを初めて知った。

サッチちゃんの頬には薄い化粧が塗られ、目もしつかりと父と母を見ている。

「わかつた。今日のうちに仲立ちさんに伝えよう。幸子もよく決心したな」

サッチちゃんは深く一礼して、二階の部屋に戻った。急いで

喬が後に従った。

「どうして、お嫁に行くの」

「ずっと喬と一緒にいたいけど、そんな我が儘もいえないものなのよ」

「ぼくと一緒にいるのが嫌になったの。ぼくがすぐ泣くから。そんなことなら、もう絶対泣かないと約束するよ」

「ありがとう。サッチャんはね、ちゃんと幸せになるためにここを出ようと決めたんだ」

「ここを出ると、幸せになれるの」

「そう、きつと幸せになれるの」

「どんな幸せになれるの。卵焼きやお菓子がたくさん食べられるの」

「そうよ。卵焼きやお菓子がうんと食べられるの。喬にも、きつと送ってあげるわね」

サッチャんの結婚話は、間をあげずに進み、漁師町に嫁いで行つた。一年半前の春だ。

喬は、サッチャんがカルタの絵にあるような綺麗な着物を着るときまで黙つて見ていたが、迎える車に乗り込もうとしたとき、自分も一緒に乗るといい出した。

「ぼくも乗る。サッチャんと一緒に乗る。サッチャんだけ乗るのは、嫌だ」

手に火箸を握り、自分の顔に向けた。

すぐ傍にいた母が、持っていた日傘で咄嗟に火箸を叩き落とし、喬を羽交い締めにして後方に連れ出さなかつたら、車

はいつまでも立ち往生していたに違いない。喬は声をあげて泣き叫び、嫌だ、嫌だ、嫌だと靴を踏み鳴らした。その隙に、サッチャんはみんなに会釈し、漁師町へと向かつたのだつた。

「何見てるの」

美奈は、喬の領内である三畳に足をかけようとした。

「入っちゃ、駄目だ」

喬は美奈の足が一步畳に踏み込んだのを目ざとく見付け、叫んだ。

「何見てたのかな」

美奈は一步退き、喬が背中に回したものを指さした。手には赤い帯を持ち、背中に隠したものは本的那样だつた。

「教えられない」

「あんまり一生懸命に見てたから、気になつたのよ。教えてくれたつていいじゃない」

「駄目なものは駄目だ。帰れよ、ここはぼくの部屋だぞ。姉ちゃん卑怯だ。昨日も勝手に入り込んで、カルタの札を盗つたじゃない」

「盗らないよ。この二階の部屋、あたしがいつも掃除してあげてんだよ。そうしたら、この板張に零れてたの。勘違いしないでよ」

喬は口を尖らせ、腕を後ろに回し、美奈を睨み付ける。後ろには、籐の籠があつて、今蓋が開かれている。籠の中には、まだいくつかの宝物が入っているようだ。

「強情だね。弟のくせ、ちつとも可愛気がないんだから」

「サッチちゃんとの約束なんだ。サッチちゃんが元気でいられるよう、お祈りしてるんだ」

「ふうん、サッチちゃんと喬だけの秘密のことね。おませなことというわね。だったらもうこの二階の部屋の掃除、してあげないよ。明日から自分でするのね」

「わかつたよ、掃除くらい平気だ。だから、誰にも入ってきてもほしくない」

美奈が右に左にと体を動かす度に、喬は美奈の顔を睨み付け、背中のものを左に右にと動かし、庇った。

サッチちゃんが女の子を生んだという。

普通だったら、お産のために実家に帰るのだけれど、母を亡くしているサッチちゃんは漁師町の家で生んだというのだ。

それより、みんなの驚きは、ほんの一年半前まで殆ど臥せてばかりいたのに、よくも生む体力があつたな、ということだった。

父も母も、嫁いでは行つたものの、あの体では台所仕事も満足にできないのではないかと心配していた。というより、近いうちに暇を出されて戻ってくるかも知れないから、二階の部屋は畳を七枚剥いだだけで、壁際にはサッチちゃんが愛用していた古びた鏡台や小物入れなどがそのまま残されていた。その後も子育てに耐えられず、子供と一緒に帰されてくるのではないかという話を、父と母は真剣にしていた。

「ほう」

「まるで、見違えるみたい」

四か月目に里帰りしてきたサッチちゃんは、手足の細さこそ変わらなかつたが、表情には母になつたという明るさと自信が漲っていて、香織という名の子供に含ませる乳も強く張っていた。

「変わったかしら」

サッチちゃんは誇らし氣にいい、「お陰様で、旦那がとても優しく協力してくれて」とのろけてみせた。

喬はサッチちゃんを独占してやろうと待ち構えていたのだが、サッチちゃんの関心がどうしても香織の方に向かうのを知り、むくれてしまった。以前みたいに喬の話に耳を傾けてくれるふうでもなく、絵本を読んでもくれるでもなかつた。

「喬、父ちゃんや、母ちゃんや、姉ちゃんのいうことをよく聞いて、男らしく立派に成長するのよ」

どころか、サッチちゃんは、これまでいつたことのないそんな強い言葉まで口にしたので、喬は一人黙って二階への階段を上った。

美奈は、喬の後ろについて足音をしのばせ階段を上がつた。喬は畳に仰向けになり、天井を眺めている。しゃくりあげているふうでもなく、足をバタつかせているふうでもない。

「今朝の喜びようはどこ行つたの」

返事がない。

美奈は、喬の顔が覗ける位置まで近寄つた。少し伸び上がる恰好で、喬の表情を見た。

「くるな、といつてるだろ」

「見舞ってやったんだけど」

「うるせえやい。放つといてくれ」

「サッチャン、そろそろ帰るかもよ」

ごろりと転げて、番は畳から板張に落ちた。美奈に背中を向けた恰好だ。

サッチャンは、香織に乳を飲ませ、自分もお茶をもう一杯飲むと、帰り支度にかかった。まだゆっくりしていけば、と父も母もいい、美奈も「泊まっていたら」と引き留めたが、「旦那がお待ちかねだから、またね」と挨拶をして、バス停まで歩いた。

バス停まで見送ったのは美奈だけで、バスがくるとさつと乗り込み、手を元気に振った。

美奈も、サッチャンのあまりの変わりように驚いてしまった。以前の青白い顔で臥せていたときと違い、動きがしゃきつとしていた。なにより、バスの中から手を振ったときは、香織の母の顔そのものであった。ねんねこを傾け、香織の顔をガラス越しに見せ、笑顔を残して去って行った。

美奈は、別れ際にもらった硬貨を拳に握りしめていた。開くと、十円だった。十円で買える物を思った。鉛筆、消しゴム、キャラメルと考えながら一人、スキップを踏んだ。

学校から帰ると、美奈はまず水汲みをしなければならぬ。料理や洗面などに使う生活水と、風呂の水である。

井戸は、家から百メートルほど坂道を歩いたところにあり、

天秤棒にバケツを二つ下げ、運んでくる。最初の二回は生活用水に、後の三回は風呂用になる。

百メートルを運ぶ水の重さは、小学六年生の美奈の肩には堪らない。道は一人がやっと通れるだけの草道であり、凹凸が激しく一杯に汲んだ水が歩く度に揺れ、大きく暴れ零れてしまう。もつたいないので零さないように歩幅を小さくするものだから、一回の行程が二十分近くかかる。それを五回こなすには、一時間半を要する。この夕方の作業が、美奈にとって最も辛いものだった。

番の守りの方は、サッチャンがいて引き受けてくれていたから背中に負わされることはなかったものの、水汲みは四年生になったときからの役目になっている。

天秤棒が撓む度にバケツが揺れ、零れた水が足を濡らす。ズックが水浸しになる。水の重さが肩の骨にまでめり込み、一往復で息があがる。それを五回続ける。終わったら、炊事の方はひとまず置いて、風呂の焚き付けにかかる。風呂用の柴に火を点け、火勢が強くなったら薪をくべる。旧式の風呂だから、うまく火が続かず、煙に噎せ返る。湯加減を何度も見て、加減がよくなったら火を止める。

風呂の火を止めると、すぐに炊事の準備にかかる。釜に八合の麦と、二合の米を入れ、研ぐ。研ぎあがったら、柴で火を起こし、薪をくべる。噴きあがれば火を止め、しばらく残りの熾火で蒸す。頃合いをみて、しゃもじで釜をかき混ぜる。終わった頃、母が帰ってくる。

「風呂も、飯炊きも済んだかい」

母の言葉は、いつも同じだ。ご苦労さんとか、ありがとうという言葉を聞いたことがない。外の仕事で疲れたのか、肩で荒い息をしながら帰ってくるので、美奈もしかたがないのだ、と思っている。

サッチャンがいた頃は、水汲みをすれば「疲れたろう」とか、「おかずの味見をしてちょうだい」とか、声をかけてくれたものだった。

サッチャンのおかずには工夫があつて、美奈や喬の好みに合わせ、香ばしい卵焼きを加えてくれたり、お好み焼きとかを作ってくれたりした。父もサッチャンの料理が好きで、焼酎の肴はないかといひ、めざしを追加してもらつたり、トリの肉を串に刺して焼いてもらつたりしていた。

母になると、胸がきついたりとか、足がむくむとか溢しながら、納戸の奥から漬物を出し、キュウリにもろみをつけるくらいがやつとである。なにも食べ物に不足があつたり文句をいふたりするのではないが、サッチャンのすることには楽しいことがいくつも含まれていたのに、母は「そんな甘やかしいいけない」という言葉を決まつて使ひ、「子供を可愛がるなんて罪作りになる」といい切つた。

母の母、つまり美奈や喬の祖母に当たる人は、近所でも無類の頑固な人を通つていた。

美奈が母の使ひで約一キロの道を歩き、祖母に物を届けても、返ってくる言葉は、「農繁期じゃる。寄り道せず、真つ直ぐに帰つて家の手伝いをしなきゃいけない」の一言だけで、

「ご苦労さん」の言葉も褒美もなかった。

であるから、元きた道をそのまま引き返すだけで、道端の小川の鮒を眺める気にもならず、木立の中で鳴いている蟬の声も殆ど耳に入らなかつた。「根性なし。動作がのろい。そんなグズでどうする」といつも叱られるばかりで、悲しくてたまらないのだつた。農家はいつも農繁期であつたが、祖母からは、正月でも盆でもどんなときでも、同じ言葉が飛んできた。

母は、躰だという言葉で、祖母の考えをそのまま美奈や喬に押し付けるので、何をしようとも、まず褒められるということがない。できて当然なのである。躰は頭ごなしにきた。

子供は親の手伝いをするのが当然であり、間違つても親に逆らつたり負担をかけてはいけない。早く一人前になつて、育ててくれた親に報いなければならぬ。遊びにかまけたり、気働きが起きず、動作がのろいと、大人になつても一人前にはなれない。勉強は、教室で一生懸命に聞けばわかる筈。本や雑誌を読んでへんな知恵がつくと、真つ直ぐには育たない。家の手伝いでも、普段の行いでも、なんでも一番を指すこと。とにかく、他人様から笑われるのが一番の恥だ。特に、長男は家を継ぐのが大切。よく自覚して、働くことだ。

これが、祖母から常にいわれることだつたし、母はその同じことを美奈や喬に強く命じた。

時には母でさえ、「実家は箸の上げ下ろしにもうるさ過ぎで、これじゃ兄に嫁のきてはいないと、みんなが噂をしている」と心配するくらいに厳しきだつたらしく、母自身も幼い

頃から、普通は男の仕事である牛を使う作業を、厳しく命じられたらしい。例えば、田植えの時期一つでも、余所に遅れをとることを最も嫌ったといい、朝は子供たちの分担で、座敷のカー拭き、庭掃き、草抜きと、祖母の目に叶うまで徹底的にやらされたといつた。

学校から帰れば田や畑に狩り出され、夜は消灯時間が九時と決められ、ランプの光が漏れ出てでもないようものなら、厳しく叱責されたという。であるから、師範や女学校への進学など、担任が数度勧めにきてさえ、祖母は頑として首を縦に振らなかった。とにかく、知見を広げさせない、そうやることで子供を手元に繋ぎ止める、という考えに拘り、例外を認めなかつたという。

同じその考えが、母を通じて美奈や喬を縛り付け、子供、たつたら周りのみんなが当たり前にしている、魚釣りをしたり、泳ぎに行ったり、漫画の本を読むことなどを禁じた。友だちと約束してきたといつても例外はなく、隣の村に出かけたりするのも駄目だし、まして島外のことを知ることなど、もつての外だということだった。

祖母の考えは、その長女であつた母によつて増幅され、子供が考え付くあらゆる発想や夢の芽の気配を感じたら、すぐに枝から摘み取るという方法に変えたらしい。

美奈は、今年の元日に菜種を植える仕事につかされたことを、よく憶えている。元日であるから、農家の子供たちだけで晴れ着に着替え、バス停への道を寄り添って出かけて行く

傍で、早朝から夕暮れまでの時間、手足が千切れそうに冷え凍える中、作業をさせられたことを思い出す。

雑煮を食べて間もなく、母はふいに菜種植えを思い立った。予告などしなかつたことを考えると、全く予定なしに始めたのだつたに違いない。美奈は、元日早々、畑仕事につかねばならないとは思ひもしないことだった。父も母も、最初腹ごなしに頑張るか、といつていたのが、道端を村人たちが「正月早々精が出ますねえ」と挨拶して通るものだから、引つ込みがつかなくなつたのかも知れない。

海からの強い北風に全身をなぶられて冷え切り、土は氷混じりになつていて、十秒もしないうちに指の感覚がなくなつた。植えた苗も地のあまりの冷たさに、力無く萎れていた。

結局、畑一枚を植え終えた夕暮れ、ようやく区切りがついたので帰宅した。

翌日も、翌々日も、父は囲炉裏端で焼酎を飲んでいたことを考えれば、元日にどんな事情があつたことだったのかわからない。

美奈は、正月二日も三日も、麦踏み、掃除、水汲みと殆ど休む間はなかつたが、家の中にも隙間風が吹き通つていそうで、毎日沈んだ空気が漂い冷えていた。

サツちゃんがいる頃だつたら、出汁のよくきいた雑煮を食べ、産土神社に参つたり、元日だけは友だちと遊んだりして一日を過ごす楽しみがあつたのに、一日一日が味気ないものになつてしまった。ほんの少し前の正月には、サツちゃんの手料理で父は焼酎を飲み、母は実家に出かけたりしていた。

「サッチちゃんは、面白いことをいくつも知っていて、友達を呼んでカルタをしたり、トランプをしたり、お手玉遊びをしたりした。お昼には汁粉を作ってくれたり、餅にキナコをまぶしてくれたりもした。父も機嫌は悪くなかったし、母も遅くまで実家で喋り込んで、すつかり骨休めをしたと喜んでくれるようだった。」

喬が囲炉裏端にいと、母から「長男というのはね」という話を聞かされた。

喬は話を避けるため、夕食が済むとすぐに、二階に駆け上がった。母は力ずくでも喬を囲炉裏端に座らせようとし、喬が逃げると自ら二階に駆け上がって話をするようになった。

それが、頻繁になった。喬はまだ小学三年生である。

「長男は家を継がんといけん。早く一人前になって、親を安心させるのがお前の務めだよ。そうしないと、家は荒れ放題になる。田も畑も草茫茫で、他人様から笑われる。そうならないよう、喬には責任がある。どこの家にも負けんようにせんといけん」

母の話は、いつもこうなる。

「本で読んだんだ。偉人伝の中のお母さんは、子供が世の中のために役に立つようになるのを祈って、お百度を踏んだり、水垢離をしたり、子供の勉強がはかどるようにと、一生懸命に頑張るんだよ。ぼくの母ちゃんは教科書の中のお母さんと違って、いつもぼくを怒り、抑えつける」

「また、そんな本なんぞを読む。本の中のことなんて、綺麗

事だし、作り話じゃないか。現にお前は長男だし、少しは自覚を持たないと」

「そんな、他人様に笑われないようにとか、なんでも一番になれとか、無茶ばかりいう」

「心構えをいつてるの。もつと強くなつて、家を背負つて立つんだよ。お前の胸の中の気の持ちよう一つなんだよ」

「本の中のお母さんは、他人様のためになることが大切だというよ。他人様の役に立つように頑張れというよ。他人様に笑われないように家を守れ、とはいわないよ」

話はこのふう流れた。サッチちゃんがいなくなると、俄然母が父を押しつけて前に出ることが多くなつたのだ。

喬が母と揉めている。

「ぼく、一生懸命に勉強して、医者になって、たくさんの人を助けたい。野口英世は農家の長男だよ。英世みたいに、アフリカにも行ってみたい」

「野口英世って、どこのどんな人か知らんけど、医者になるにはお金がかかるじゃないか。アフリカには、蛇やライオンも棲んどるんよ」

「貧しい人や困っているたくさんの人々の、ひどい病気を治してやりたい」

「でも、喬は家を継がなきゃならないよ。アフリカなんかに行く暇などないし、第一危ないよ。一番大切な家の仕事の方はどうなる。放つたらかすというの。家が荒れ果ててしまつても構わないというの。アフリカなど行って、遊び呆けてる

場合じゃないだろ」

「遊びに行く人と違うよ。人のためだよ。困っている人々のためだよ」

「一生懸命勉強したい？ 困っている人の役にたちたい？

とんでもない夢みたいなことばかりいうて、お前って子は。

家の方が今、現に困ってるじゃない。とにかく、普通の子になることが先だ」

母の声が甲高くなる。喬も負けずに、声を張り上げる。

「サッチャンは、とてもいいことだと褒めてくれたんだよ。

頑張りなさいって」

「でも今、サッチャんはいないじゃないか。第一、婆ちゃんに叱られる。長男なのに、肝心の家の手伝いもろくにしないで、理屈ばかりいってるとね」

「理屈じゃないよ。二人とも、何でもすぐに駄目だ、駄目だというばかりで、聞こうともしないんだ。わからないよ、ちつとも。なんで、ぼくのいうことはいつも莫迦にされるの」

これは今に始まったことではない。

美奈も、数え切れないほど口惜しい思いをしたことがある。

自分の部屋に小さな姿見を買ってほしいと相談したときも、子供には必要ないとのことだった。「りぼん」という雑誌を買ってほしい、ラジオを買ってほしいなどといくつかの希望をいったことがあるが、「そんな本を読んだり、ラジオを聞いたりするのは不良の始まりになる。もつと、腹の足しになることに真剣にならないと、先々で地に足の付いた暮らしを築くためには、てんでよくない」と一顧だにされなかった。

「美奈は長女だから、家のためにしつかり働いて、喬をちゃんと支えてやるんだ」

決まって返ってくる言葉が、こうだった。

「ぼくは本当にこの家の子なの？ 実際、一度もこの家で可愛がられたことがない」

口を尖らせた喬が、しまいに母に食い下がる。

いつもの、長男はのくだりが囲炉裏端で一時間以上も続いた。父は公民館長の集まりだとかに出て不在だ。多分、十二時近くになって、五、六人の酔っぱらいを連れ、帰ってくる筈だ。

「小さいときは、そりゃあ可愛がったよ」

「嘘だ。違うよ。小さいときにはサッチャんと一緒だったんだ。今は、虐められているだけだと思っうよ。ぼくの何がそんなに憎いんだよ」

「何も虐めてなんかいるもんか。当たり前のことだよ」

「そうは思わない。ぼくはいつも、本当はこの子ではないんじゃないかと思ってる。きつと、貰い子に違いない。そりゃあ、いつつけをあまり守らないぼくのが憎たらしいかもしれないけど、相談の一つも聞いてくれたことがないし、いつも頭から怒られてばかりいる」

「これは、親が子にしなければならぬ躰だよ。ちゃんとしてないと、世間の笑われものになるから」

「ぼくは構わないよ、笑われものになってもいいよ。長男、長男っていったい何だよ」

「この子は何とみつともないんだらうと、みんなからいわ

れてしまう。それは長男の責任だよ」

「みんなって誰のこと。恥ずかしいのは誰なの」

「父ちゃんも、母ちゃんも、美奈だつて恥ずかしい思いをするよ」

「ぼくのために」

「そう。だから、とにかく親のいうことを聞きなさい。肝心の大切なことだよ」

母は、このあたりまでくると、苛立ちを隠さなくなる。

「先生は、家でも勉強をしなさいとか、遊びに行くときは友だちと誘い合つて行きなさいというけど、家で勉強をしようとするとな怒られるし、友だちと遊びにも行かしてもくれない。エジソンの話をして知らないというし」

「母ちゃんの学校時代には、習わなかつたね。エジソンってどこの何様よ」

「てんで考えられないよ。もう、話にならない。婆ちゃんも同じだ。少しは、勉強してみなよ。子供が学校で何を習っているかぐらい」

「婆ちゃんは、農家の子は家で本を読んだりする暇があつたら、草の一本でも抜きなさい。水を汲んだり、薪を探してきなさい、というよ」

「わからないじゃないけど、ぼくにはどこにも行くな。何にもなるな、ということに聞こえる」

「そうだよ。長男だから当然だろ」

「学校で、将来何になるかと聞かれて、みんな先生とか、医者とか、駐在さんとか、漫画家とか、野球の選手とか、学者

になるとかいうんだ。東京に行つて歌手になるという子もいるよ。家の跡を継がなきゃ、なんていつたのは、ぼくだけだ」

「立派だよ。母ちゃんも嬉しいし、婆ちゃんも喜ぶよ」

「でも、ぼくは本当は家になんかいたくない。勉強して、大学に行つて、世の中の役に立ちたいんだ。そうなると、外国に住んだりしなくちゃならないかも知れない」

この頃の番は、ほんの少し前まで虐められて泣いていたと同じ子だろうかと思えるほど、はつきり自分の意見をいうのだった。

「サッチャンがいるんだつたら、少しは我慢しないでもないけど」

「何ということ。また、憎たらしいことばかりいうねえ」

「で、うちは本当に貧乏なの」

「お金持ちではないよ。でも、ちゃんと食べていけるだけの田畑はある」

「そうだよね。だつて、父ちゃん、毎晩酒飲んで騒いでるんだもんね」

こういう会話が続く。母ももて余すのかと見ていると、口を引き結び、絶対一步も引かない。

六年生の二学期に、長崎からの転校生がきた。高木洋子という子だ。洋子は島の子には見ない色白で、父親の駐在所の転勤できたという。

クラスのみんなは洋子を取り巻いて、長崎の話を目をそばだてて聞いた。

アーケードという通路の両側にたくさんのお店があり、買い物客で賑わっていること、チンチン電車が走っていること、電車道の両側には建物が並び人々はそこで仕事をする事、広い公園があること、教会の鐘が街に鳴り響くことなど、不思議の国の世界だった。クラスには、長崎に行ったことのある者はいなかった。洋子の洋服は洒落ていて、肩口がだんごに膨らんだり、長い髪に赤いリボンを付けたりしていた。スカートもふうわりして、可愛かった。

美奈は、洋子に近付けないものを感じた。母や祖母から日頃要求されているものせいでか、美奈の気持は頑なになった。やっぱり長崎のことなど、知ってはいけないことなのだと後じさった。長崎では、ちゃんとした仕事に就くために、みんなが家でも時間を決めてしつかり勉強するのが当たり前で、いい中学からいい高校に行き、有名な大学の好きな学部に入るのを目指しており、一生懸命に競い合うのだといった。瞬く間に、洋子は全校に知られ、どの教科でも飛び抜けた高得点を取った。

休みの日は、美奈も喬も田圃に入って行かなければならない。朝の六時半には、まだあたりが冷え切っている田圃に入り、正午のサイレンが鳴るまで屈み込んで稲を刈る。顔を刺す稲の葉や穂に屈み、鎌を操りながら、稲株の中を何度も往復する。最初、屈めた腰が痛くてたまらなくなるが、我慢して辛抱していると、終いには痺れて固まってしまふ。

正午になると、固まってしまった腰をようやく伸ばし、田

圃から上がり、土手に筵を敷いて昼飯を食う。美奈も喬も疲れ切っていて、喋る気にもなれない。

父は煙草を取り出し、火を点ける。

「今年も実入りが今一つ芳しくない。元気のいいはこの雑草ばかりだ」

腰に差した鎌で、丈高く伸びた雑草の首を一気に叩き切った。母は、食事の後片付けに余念がない。昼食を食べるのに、二十分もかからない。やかんのお茶を飲み終えると、すぐに午後の仕事になる。

時間が長い。時間の移るのが、気が遠くなるほど遅い。細くひよろ長い狭い一枚の田圃が、どこまでも果てしなく伸びているかと思える。鎌を持つ手が重い。腰が痛み、痛みを通り越して痺れとなり、終には感覚がなくなる。気が付くと、稲の穂に顔を半分埋めている。

「美奈と喬、手が動いてないよ。腰が砕けてるじゃないか」
母は不機嫌だ。もう何度目になるのだろうか、二人に向けて鋭い声を発する。

沢に水の落ちる音と、蛙が鳴き交わす声のほかに音はない。周囲は、段々の棚田になつていて、太陽は頂点に昇り、じつとそこに張り付いたままだ。

時間とはこんなにも遅く時を刻むものだったろうか、と美奈は思う。横の喬を見ると、目が腫れぼつたい。稲の葉で刺され、涙を流し続け腫れあがったのかもしれない。

間近で、五時のサイレンが鳴り始めた。時を告げるサイレンが、途方もない長さで鳴り、あちこちの棚田を泳ぎわたり、

しばらく尾鰭を震わせ、やがて落ちていった。

しかし、五時のサイレンが鳴つても、田を出ることはない。太陽はかなり西に動いたものの、まだ真昼の勢いを十分に留めている。

「ようしゃ、まだまだじゃあ。秋の日は短いからな」

父が声をかけ、ポケットから煙草を抜き出し、火を点ける。朝早くから田圃に入つて、いつたどれだけ刈り取つたのだろうと美奈は考える。そんなに広くもない田圃一枚と、半分ぐらいだ。

同じクラスの昌子や恵子たちは、今日は学校の校庭でドッジボールをする話していた、などと今頃になって思い起す。二人は、農家の子ではないので、休みの日は校庭で遊んだり、川で遊んだりすることができるのだ。それに、ときどきはバスに乗つて、島で一番の賑やかな町まで買い物に連れて行つてもらふこともあるという。

洋子はどうしたろう、と考える。まだ転動してきたばかりだから、片付けがとでも大変なのよ、といつていた。

「義務教育が終わつたら、一人前なんだよ」

母は、高等小学校を終えると、牛を使つての田起こしから、種蒔き、田植え、稲刈り、麦踏み、麦刈り、菜種植えなど、親よりも先に起きて田畑に出たという。

「牛を使つた後は、もう夕飯が喉を通らないほどに疲れたよ。また、十五かそこらだった。仕事は何でもしやんとしないと、とこつびどく怒られた。怠け者のことを魂なしというんでね、

婆ちゃんから魂なしといわれるのが、そりゃあ口惜しくて、恐くて」

母も、ときどきはこぼすことがある。女学校にも行きたかつたのだそうだが、「高等小学校出たら、もう教科書はいらんといわれたよ」というのは、やつぱり嬉しいことではなかつたらしい。女学校で音楽や国語を勉強するのが、夢だつたらしい。しかし、今母が美奈や喬に強いていることは、母が幼いときにさせられたと同じことだ。

「自分が学校に行けなかつたら、普通は子供には同じ目にあわせないように、と考えるんじゃないかしら」

と美奈が聞いたことがあるが、母は少しも動じなかつた。どころか、ときどき「義務教育の中学校出たら、働き手が一人できる。有り難いことだよ。誰に遠慮もいらぬ、ちゃんとした一人前の大人だよ。そこまで育つてくれたということ、嬉しいんだ。美奈がもう少し気働きができるようになつたら、もつと助かるんだけど。あたしも、上の学校に行けないといわれたときは、口惜しくてたまらなかつたけど、婆ちゃんがいうとおり、今考えてみたら地に足の付いた良い選択だつたんだと思う。お陰で普通に結婚もし、子供にも恵まれ、世間に恥ずかしくない生活が送れてきたんだ」などと仄めかすこともあつた。

それにしても、中学校を出たら一人前。ということ、母がかつて女学校に行きたかつたということは、どう関係があるのだろうか。自分が上級の学校に行けなかつたら、子供も同じ道を辿れ、というのだろうか。自分の口惜し

さのことは、時間が経ち、立場が変わればすっかり忘れてということなのだろうか。

それに、喬にはいつも、農家の子が学問をすることは罰当たりだという、子供の身にはどうにもわからない、何か深い意味があるのだろうか。その考えが、日頃の祖母の教えからきていることに違いはないのであるが。

「中学校を出たら、一人前」

美奈は母の言葉を反芻する。村には、中学校を出ると同時に子を生んだ先輩がいて、その家では親の子として、つまりその子の妹として、普通に育てられていると聞いている。

しばらくの間は、これでめでたく一人前だからあんな器量よしだし、若い男たちが放つとくわけないよとか、どうも爺さんの子じゃないかしらんとか、賑やかな噂が流れていたが、すぐに話題にもぼらなくなつた。

喬は、母には本気でいい返すようになつた。

「学校で習う偉い人たちのお母さんは、うちの母さんとは全然考え方が違うよ。自分の子供が可愛いと思うのなら、子供を力任せに押さえ付けるばかりでなく、子供の将来のことを一番に考え、この子は何か大切な目的を持って、生まれてきたのかも知れない。できれば、世の中のために大きく役立つように育ててほしい、というふうに考えを変えることだよ。」

そう、先生がいつもいうよ」

「お金持ちの家の話だろ。このあたりでは聞かないね」

「そうだろうけど、お金がなくなつて子供に夢や希望を持た

せるため、いろいろ工夫してんだ」

「きつと、偉い家のことだろ」

「偉くはなかつた家だけど、そのお母さんの育て方のお陰で、結局偉くなり、育てたお母さんだつて尊敬されることになつたんだ」

「尊敬などされなくてもいいから、家の跡継ぎを育てることが私の役目なんだ」

「家の跡継ぎをしないとはいわないよ。そのお、つまり、東京に引越したとしても、そこでも跡継ぎはできるんだよ」

「わからない子だねえ。母さん、頭が変になりそうだよ」

「何一つわかるうとしないよ、それで親なの。こつちの方が頭が痛くなるよ」

「そこまでいうのなら、婆ちゃんにきてもらうから」

「ああ、婆ちゃんにも同じことをいうよ」

「俺は見事に挫折した。なんてたつて、金ポタンに高下駄でな。そりや自慢やつたでえ」

父と同級の隣班の公民館長永村が、目も開かないほど酔っている。上体を揺らす度に、首から下げたタオルがずり落ちそうになる。

「とにかく、天下を目指すつもりじゃつた。それがよ、二年の春、親父の奴が頓死しやがつた。これで、何もかも真つ逆さまだ」

その話なら、村の誰もが知っている。五十人の同級生の中の、一人か二人しか中学には進めなかつた時代なのだ。永村

は、父の死によって中学中退を余儀なくされ、結局長男であることから、家業の農業を継ぐことになった。ただ、永村の家は代々が庄屋だったので、耕作地も他に比べ三倍はゆうにある。

「この口惜しさといったらない。わかるかあ、おい、水飲み百姓め」

父に向かつていう。父は気心が知れているので、「もともととは俺の方が貴様より成績は上じやつたろ。高等小学校を出るとき、担任が師範に出さんかと、三遍親父にかけ合つてくれたんだ。が、痲癩持ちの親父、何の虫の居所が悪かつたのか、担任と派手に喧嘩しよつてな。それで話はパーよ」とい

なした。

二人は酔うと、いつもこの話を始める。
「百姓には絶対なるもんじゃねえ。何でじゃ。米も葉煙草も大水には遭うし、ウドンコ病に台風じゃ。これじゃ肥料代も取り戻せんでの」

「田畑があれば、食うには困らんと戦後すぐまでいわれとつた。それがな、今の給料取りの羽振りの良さはどうじゃ」

「俺も師範出てたら、もう間違いのう教頭にはなつとるで」
「それをいうな。親父がまともやつたら、俺も医者か県会議員ぐらいにはなつとるぞ」

というところで、二人は上体を右に左に揺すり大笑いし、「お互いに、親父がどまぐれちまつたばかりになあ、挫折じや、挫折」と鼻水を拭いながら握手を交わす。

台所に落ち着きなく座る母は、この話になると美奈と喬を

自分の部屋に追いやる。

美奈たちが自分の部屋に入つても、酔いの回つた父たちの高声は耳の傍に聞こえる。

同時に、母の機嫌が極端に悪くなり、胸をさすつたり、首をさかんに回したりしているのが見てとれる。

「そんなつまらん話を聞かせたら、婆ちゃんの日頃の教えが台無しになつてしまふ」

母の激しい苛つきが、美奈にも喬にも稲妻の走りに似たスビードで伝わってくる。

サッチャンがいた頃は、父も遠慮したのか、それとも妹の身を案じていたのか、こんな話には及ばなかつたし、永村もサッチャンを刺激しない程度で切り上げた。

永村と父の笑い声は延々と続き、終いには皿を箸で叩いて演歌や軍歌を唸つた。

サッチャンが秋風邪を引き、心臓の持病を悪化させ寝込んだという噂が聞こえてきた。

嫁いで以来、すこぶる元気だという便りばかり届いていたのが、やはり実家に遠慮して、できるだけ心配かけないよう

に努めていたというらしい。それでも、一週間後には布団を畳んで起き出したというから、気持ちの持ち方で随分変わるものだと父がいつた。

「爺さんの十年祭にはくるいうてたぞ」
父は祖父の十年祭を営むという用事があり、サッチャンに直に会つてきたらしい。祖父の十年祭といえ、間もなくで

ある。

一番喜んだのは喬だった。三畳の部屋で、遅くまで起きていて籐の籠の中身を何度も取り出し、眺めているのだった。

当日、バス停まで迎えに出た喬の先導で、サッチャンは病み上がりらしく少しよろめきながら、しかしとても明るい笑顔でやってきた。香織もふつくら丸く、元氣そうだった。

神官さんの祝詞の間、サッチャンは背筋をスツと伸ばし、これまでに見たことがない落ち着いた姿で座っていた。サッチャンの後ろには喬が、その後ろには美奈が香織を抱き、香織の柔らかい頬を撫でながら座った。美奈は、サッチャンがいるだけで、この家がほのぼのとした雰囲気になるのを、式の間中、何故だろうと考えていた。一番変わるのは喬と父で、父など、どこか頬が緩んでいるとしか見えない。

「ご安心でした」

サッチャンは式が終わり、直会の前に、父と母に向かつて少し他人行儀な挨拶をした。その後、香織に乳を与え、自分はずすがに食欲はまだ戻らないらしく、柔らかいそうめんなどを食べ、早めに席を立った。

「ゆつくりしていつたらいいのに」

「きたばかりじゃ、遊んでいったっていいじゃない。つまらないよ」

サッチャンはいつものとおり、「旦那がお待ちかねだから、またお世話になります」といい、本当に門口に出た。

見送るのは喬と美奈で、喬がサッチャンの前になり、美奈が後ろになって歩いた。

美奈は、サッチャンが少しづつ遠くに去って行くのを感じながら、やっぱり一緒にいてくれたらどんなにいいだろうと、考えていた。

喬は、バス停からの帰り、いつも母からきつく叱られることを、サッチャんにヒソヒソ声で話したんだといった。

喬がときどき口にする「自分は、祖父ちゃんの子ではないか」ということを思い切つて聞いたらいい。サッチャンの顔色は少しだけ青く見えたものの、「喬は間違いない、お父さんとお母さんの子よ」と強くいわれたという。

「祖父ちゃんの十年祭の祝詞を聞いていたら、ますますそんな気が膨らんできてね。サッチャンなら、間違いなく知ってる筈だと思つたからさ」

「喬が、お祖父ちゃんとお母さんの子、というわけ。まさかねえ。だとすると、何かが解けるのかなあ」

美奈には、これまで夢にさえ思ひもしないことだったが、嫁に行く前のサッチャンの喬に対する接し方や可愛がりようは、今考えると、喬のいうこともあるいは一理あるのかもしれない、と唸つたほどだ。とすれば、喬はサッチャンの弟であり、事情を知らないのは自分だけになる。

父は殆ど日は部落の会合に出て、いつの晩も十二時近くにならないと戻つてこなかったし、祖父ちゃんは喬が生まれる半年前に死んだのだ。五十一歳という若さで。

喬は父にも似ているが、法事の遺影で間近に見た色白で面長の祖父ちゃんに、驚くほど似ている。どこか百姓離れた

雰囲気も。

「当てが外れたよ。聞かなきゃよかった。サッチャンはもう、ぼくの届かないところに行っちゃまったな」

喬は泣き出しそうな声になった。

確かに喬は、サッチャンからたくさんの本を読んでもらい、「家のこともだけど、自分のことは大切にしなければいけないよ。せつかく生まれてきたんだから、精一杯頑張ってみないとね。サッチャンは体がこんなに弱いけど、美奈ちゃんや喬はこれからだもの。楽しみだね。サッチャンは、きつと応援するからね」と、いつも励ましてくれた。

喬は母との意見が合わなくなると、二階の三畳に逃げ上がり、一人に籠もることが多くなつた。母が二階まできても、返事もろくにしないようになり、「困つた子だよ。どういふ魂胆だかねえ、聞き分けがちつともない」と母をさかんに口惜しがらせていた。

美奈は、喬が三畳の隅の籐の籠に、サッチャンからもらつたものを自分だけの宝物として隠しているのは、勿論知っている。

カルタのとき、喬は血相を変えて一枚を取り返しにきたけど、田圃で二人ともへとへとになり、美奈が毎日水汲みをしている様子などを見ているうち、美奈のことを少しは心に留めてくれるようになったらしい。

「いいもの見せるから」

帰り着くと、喬が美奈に耳打ちして二階に上つた。美奈が

畳の端まで行つて立つて立っていると、「入つていいよ」と初めて喬がいつた。喬は、鮮やかな図柄の見たことのない筒を取り出し、美奈に渡した。

「美しいものが見える。ガラスのところから、覗くんだ」

美奈は筒を受け取り、ガラスを覗き込んだ。中には赤や黄や紫の鮮やかな模様が、華やかに輝き、宝石みたいに光っていた。筒を少しだけ動かすと、赤い宝石が散つて、鳥の形や、王様の冠みたいな形がいくつも現れた。

「綺麗だねえ。どうしたの、これ」

「サッチャンがお嫁に行くとき、お土産にくれたんだ。姉ちゃんの分も預かつてた。だけど、ぼくが泣かないようになるまでは開いては駄目だつて。で、ぼくは決心した。きつと何とかなるよ」

「そうかあ、喬がねえ。本当に大丈夫かな」

喬は、無理矢理とも思える恰好で頬を膨らませている。しかしこうやって、少し斜めに睨み上げたところが、なんとなく遅く見えてき始めたから不思議だ。

美奈は、万華鏡と書かれた筒を回してみた。美しい花や、口ケツトや、建物の形が、次々に現れ、次々に姿を変えた。

「喬も少しだけ、強くなつてきたね。姉ちゃんだつて、負けないよ。競争しようか」

美奈は濡れ始めた自分の横顔を喬に見られないよう、何度か万華鏡を右に左に回した。

(了)